

# **上桜井北遺跡 試掘調査報告書**

**1977年8月**

**佐久市教育委員会**

## 本文目次

本文目次

表目次

挿図目次

I 遺跡の環境	1 ~ 6
1 地理的環境	1
2 桜井の歴史	4
II 調査の経緯	7 ~ 11
1 調査に至る経過	7
2 調査概要	7
(1) 調査委託者	7
(2) 調査受託者	7
(3) 調査場所	7
(4) 調査期間	7
(5) 調査参加者	7
(6) 調査方法	7
3 調査日誌	9
III 調査結果	12 ~ 13
1 層序	12
2 トレンチ別概要	12
(1) A トレンチ	12
(2) B トレンチ	12
(3) C トレンチ	17
(4) D トレンチ	17
3 まとめ	

## 表 目 次

第1表 上桜井北遺跡と周辺遺跡表	3
第2表 調査日誌表	10

### 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)	2
第2図 遺跡の地形及びトレンチ設定図 (1 : 2500)	8
第3図 A・Bトレンチ平面図及び断面図 (1 : 100)	13
第4図 C・Dトレンチ平面図及び断面図 (1 : 100)	15

# I 遺跡の環境

## 1 地理的環境

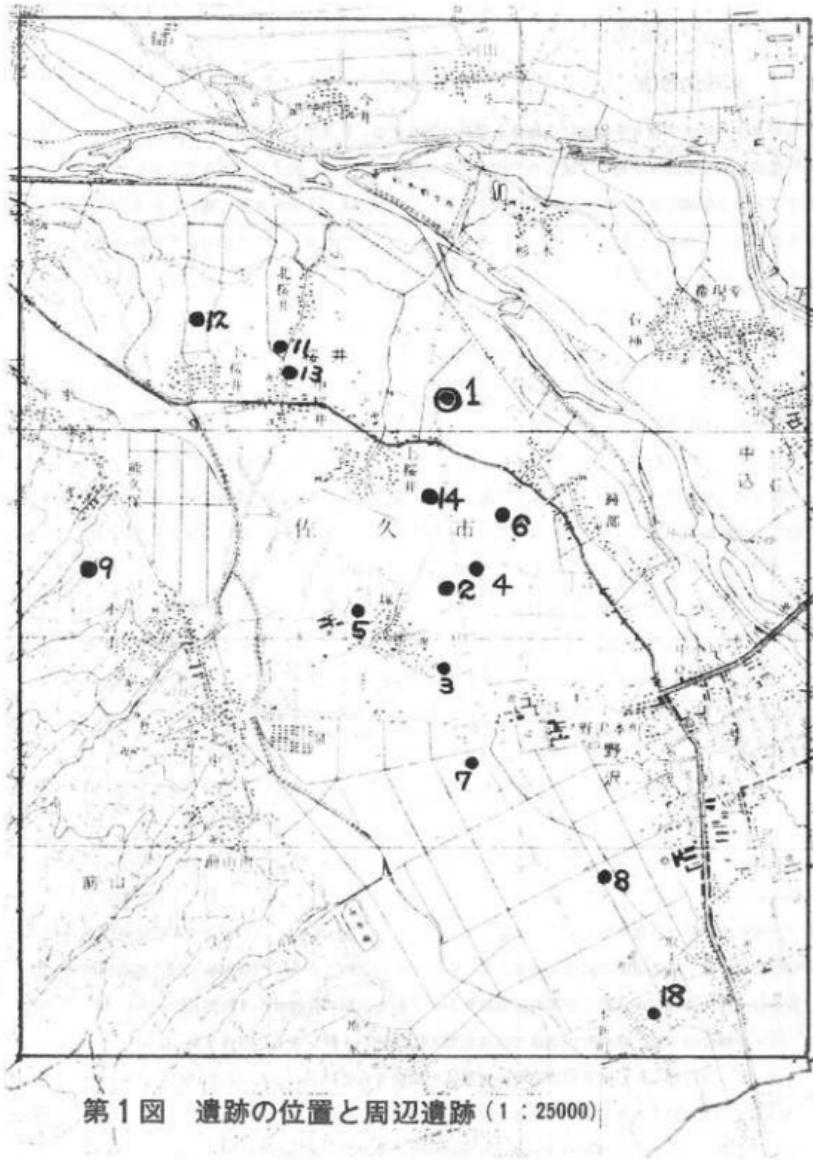
長野県佐久市大字桜井字橋詰に上桜井北遺跡は所在する。佐久市は、東西 28.3 Km・南北 22.7 Km・総面積 193.1km<sup>2</sup>を測る広域な市で佐久平の大部分を占める。佐久市の平坦部を地形的に大別すると、3地域に分けられる。第Ⅰ地域として、旧浅間山系の火山灰流層に覆られた旧浅間町地域がある。この地域には随所に「田切地形」が見られる。第Ⅱ地域として千曲川東岸の複合扇状地がある。千曲川氾濫源に香坂川・内山川等が注ぎ込み浸食堆積されたものであり、一部は近年まで湿地帯であった。第Ⅲ地域として、千曲川西岸の臼田町を頂点とする三角形の沖積地がある。千曲川に沿った帯状の微高地と片貝川流域の低湿地とが観察できる。

上桜井北遺跡は、第Ⅲ地域の帶状微高地上に位置している。この地域はおおむね北方向の幾状の帯状微高地が観察できる。

取出から桜井にかけたこの地帯には、先史・原史時代の人々の生活の痕跡が多数残されている。まず縄文時代の野沢宿裏遺跡・桜井の宮浦遺跡で中期後半の加曾利E期の遺物が見られるが、この時代の遺跡が多く存在するのはやはり西方の蓼科山・八ヶ岳山塊より平地に伸びる舌状の台地上である。小宮山の後沢遺跡では、前期・中期の住居址が 10軒検出されている。

帯状微高地上に本格的に人々が居住するようになったのは、弥生時代であり灌漑用水が豊富に得られる土地に臨んだところに集落が営まれた。この地帯では、弥生時代の中期・後期・特に後期の遺跡がかなり存在する。町田遺跡では昭和の初年に八幡一郎氏によって、弥生時代中期の「町田式土器」として注目された資料が出土している。桜井の下桜井北遺跡からは、栗林式土器と百瀬式土器が出土している。後期の箱清水式期の遺物は泉小学校周辺から特に豊富にみられるが、確認された遺構は未だない。西方の台地上の後沢遺跡では、弥生時代中期～後期の住居址 30軒が検出されている。

つづく古墳・歴史時代に入ると一層集落として、利用されたのであろう。この時代の遺跡は近年の佐久平闢場整備事業の影響で数多くが発掘調査されている。順に列記してみると、儘田・中道・三塚町田・鶴田・跡部町田・市道遺跡がある。検出された遺構は、儘田遺跡で平安時代国分期の住居址 4軒・中道遺跡で古墳時代鬼高郡 2軒と国分期 5軒である。三塚遺跡では、鬼高峰期の住居址が 2軒・国分期が 1軒、三塚町田遺跡においては鬼高峰期の住居址が 1軒確認されている。鶴田遺跡で国分期 1軒、跡部町田遺跡では鬼高峰期の住居址が 5軒、さらに市道遺跡においては、和泉期 1軒、鬼高峰期 7軒・国分期が 2 軒の住居址が検出されている。これらの集落は、古墳時代や歴史時代の各時期における複数の集落なのか、または単一の集落なのかは、現状の点と点の発掘調査では推定の域を脱し得ない。残された資料を密に調査され集落構造の詳細な解明にあてな



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25000)

第1表 上桜井北遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	繩	弥	古	歴	備考
1	上桜井北遺跡	大字桜井	微高地	○	○	○	○	S52年8~10月発堀調査
2	市道 "	大字三塙字市道	"	○	○	○	○	S49年8~9月発堀調査
3	三塙 "	大字三塙 字東野沢田	"	○	○	○	○	S49年1月 "
4	三塙町田 "	大字三塙字町田	"	○	○	○	○	S49年11~12月 "
5	鶴田 "	大字三塙字鶴田	"	○	○	○	○	S50年5月 "
6	跡部町田 "	大字跡部字町田	"	○	○	○	○	S50年12月 "
7	中道 "	大字野沢字中道	"		○	○	○	S46年11月 "
8	儀田 "	大字野沢字儀田	"	○	○	○	○	S45年9月 "
9	後沢 "	大字小宮山字後沢	台地	○	○	○	○	S51年10月~S52年6月 "
10	中桜井南 "	大字桜井字中桜井	微高地	○	○	○	○	
11	宮浦 "	" 下桜井	"	○	○	○	○	
12	下桜井北 "	"	"	○	○	○	○	下桜井北一帯が遺跡である。
13	平馬塚古墳	"	"		○			古墳
14	桜井町田遺跡	大字桜井字上桜井	"		○	○	○	弥生中期町田武士器出土
15	東 "	"	"	○				
16	十二塙 "	"	"		○			
17	紀田道付近 "	大字桜井	"			○		
18	高畠 "	大字本新田	"		○			S44年11月~12月発堀調査

※(参考資料) S31年信濃史料第1巻上、S46年度農業振興地域等開発地域  
埋蔵文化財緊急分布調査報告書、S49年度市道遺跡発堀調査報告書

ければならない。

(林 幸彦)

## 2 桜井の歴史 —原始時代から中世まで—

八月下旬から佐久市桜井地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が上桜井北遺跡に於て行なわれているが、その出土遺物は古墳時代から中世に及んでいる。そこでこの時代に於ける、桜井地区的自然、歴史的環境を文献、伝承の面から考察して、考古学的調査の成果と合わせて究明する一資料としたい。

桜井地区はその東と北を千曲川が大きめぐり、その西は片貝川が北流して、北西の岸野付近で千曲川に合流している。その土地は大部分が千曲川によって運ばれた沖積地で、北に向って緩傾斜し、いわゆる般倉野沢平の扇端をなしている。そのため湧水が豊富で水利に恵まれ、佐久嶺の産地として名高い。特に上桜井は湧泉が多く、古来極寒のときも川に氷の張ることがないといわれている。上桜井北遺跡はこの平地の末端に近く、全面を礫層に覆われている。大小の礫はすべて丸石を帯びた川原石で、その岩石の組成の割合は千曲川の礫群と同様であり（臼倉盛男氏）千曲川の氾濫によるものであることは明らかである。西方下桜井方面は片貝川の流域で、前山・岸野地区と共に佐久地方における古代水田のもっともはやく開けた土地である。

この様な自然環境のもとに、桜井地区はほとんどその全面にわたって弥生時代・古墳時代の遺跡が分布している。これに対して縄文時代の遺跡は中桜井の宮浦にわずかにみられるに過ぎない、古墳は平馬塚がある。

桜井・前山・岸野・大沢など片貝川下流域は、佐久平における古代水田の最もはやく開けた地域であり、弥生時代後期には下桜井北・中桜井宮浦・上桜井北・町田・十二塚等に集落が形成されていた。古墳時代にはこれらの集落はさらに拡大されていった。

大和朝廷によって、国・郡・郷・里制が布かれると、この片貝川下流域一帯の水田地帯には刑部郷が設置された（和名類聚抄）。大和朝廷における有力氏族の大伴氏の一派は、はやくより中臣松本平に入つて筑摩の県の主宰者としてその勢力を張っていたが、その一部はさらに東信地方に入った。小県郡海野には平安時代のはじめ大伴連忍勝というものが氏寺を建てていたことが知られている（日本靈異記）。彼らの一族は佐久郡にも入つてその勢力にものいわせて、刑部郷を中心として付近の沖積平野の開墾を行ない、律令制度の崩壊につれてこれを莊園化してついに伴野庄が成立したのである。延喜式の佐久郡大伴神社も彼等大伴氏の一族によって祀られたものであろう。

伴野庄はやがてその在地領主権を確保するために、中央の有力貴族である藤原氏に寄進され、それはまた平安時代末期にはさらに院領に寄進されている。（大徳寺文書）

平安時代末期には、次第に実力を養ってきた地方の農民地主が武士化して、源氏・平氏を棟梁

として、ついに公家にかわって政権を握ることになる。保元・平治の乱には根井・根津・平賀など佐久武士が活躍している（保元物語・平治物語）。さらにも仁王の令旨を奉じて平家討伐の旗あげをした木曾義仲軍では、佐久の武士団がその主力を構成している。根井・橋の父子を中心に、八島・根津・海野・落合・小室（諸）・望月・志賀・平原などがある。その中に桜井太郎、同次郎の名があるのに注目しなければならない（源平盛衰記）。望月牧等を中心とする佐久の牧馬と、佐久平の米の生産力が佐久武士団の戦力をここまで高めたのである。桜井太郎、次郎も北陸道を急襲のように進撃する木曾軍の武将として、桜井郷の一族郷党を率いて平安の都に旗を立てたことであろうが、木曾軍の敗戦によって雄図むなしく、その後どうなったか知ることができない。源頼朝は平家討滅の戦功によって、佐久郡伴野庄の地頭職を甲斐源氏の小笠原長清に与えた（吾妻鏡文治二年十月十七日の条）。

長清は頼朝の信任厚い鎌倉幕府の重臣で、甲斐・信濃・河波等の諸国に多くの所領を有したが、そのうち佐久郡伴野庄を六男時長に大井庄を七男朝光に与えた。伴野庄地頭小笠原時長、時直の父子二代は小笠原惣領職をもって威勢頗る盛んであり、騎射に長じて典型的な鎌倉武士であった。弘安二年（一二七九）十二月、一遍上人が伴野庄を訪れ踊り念仏を行ったのは時直のときで、（一遍上人絵伝）野沢の金台寺はそのとき時直によって念仏道場として開基され、跡部の踊り念仏はその伝統を今に伝えているものとされている。また跡部の鍛錬場地蔵はこのとき伴野時直が金器を鋳させて一遍上人に寄進した鍛錬場の跡であるといわれる。

伴野小笠原氏は時直の子長泰のとき、弘安八年（一二八五）十一月、安達泰盛の乱（霜月騒動）に連坐して、父子五人北条氏のために誅せられ墮滅的な打撃を受けてしまった。

元徳元年（一三二九）三月の源訪神社上社の五月会頭役結番の中に、佐久郡伴野庄桜井・野沢・白田郷丹波前司跡とある。（守矢文書）丹波前司は丹波守であった北条氏をさすものと考えられるから、霜月騒動以後は桜井郷等は北条氏が地頭になっていたものと思われる。

元徳二年花園上皇は佐久郡伴野庄を京都の大徳寺に寄進した。元弘三年（一三三三）五月後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒すと、その六月に伴野庄地頭職も大徳寺に寄進した。

建武二年（一三三五）に伴野庄の現地の役人が大徳寺に伴野庄の年貢の数量を報告しているのを見ると、野沢郷千三百貫文、伴野上中下三ヶ村（現在の小宮山を除く旧前山村全体）千貫文について、桜井郷八百余貫文とあり、桜井郷が伴野庄内の大村であったことがわかる。しかも郷内に領主の直营地である佃も二町歩あり、桜井郷が地味の肥えた良田であったことを示している。

#### （大徳寺文書）

そのころ伴野出羽弥三郎長房が、伴野庄内で勢力をもりかえし、伴野庄の年貢を横領して大徳寺へ送らなかつたので、大徳寺から朝廷や幕府に訴えたが、長房の代官がなかなかいうことをきかなかつた。（大徳寺文書）

伴野長房は足利尊氏に属し、尊氏の重臣高師直と親しかったらしい。彼は京都の工御門油小路に邸をもち、伴野庄には代官を置いて管理させた。興国六年（一三四五）八月には足利尊氏、直義が天童寺供養の儀にのぞむにあたってその先陣隨兵を勤めるなど、かなりの勢力をもっていたが、正平八年（一三五三）六月九日長房は足利義詮の軍に属して京都の神楽岡で、南朝方の楠正儀らと戦い、敗れて戦死し、彼の工御門油小路の邸も焼失した。（圓太唇）

戦国時代には伴野光利が前山城を築いて、光信・貞祥・信守と伴野氏は代々前山城によった。伴野庄の各郷村には一族や家臣を代官として分置してその管理にあたらせた。諏訪御符礼之古書をみると桜井郷の代官として次のような名が見える。康正二年（一四五六）と寛正六年（一四六五）鷹野中務満吉。応仁元年（一四六七）入道沙弥道清、文明四年（一四七二）鷹野中務入道沙弥道中子息慶野又五郎橘棟吉。文明十二年（一四八〇）鷹野美濃守満守、長享二年（一四八八）土佐守棟信、丹後守棟清等で、戦国時代のはじめの頃は桜井郷は鷹野氏が前山城主の代官として管理にあたっていたものである。

天正十年（一五八二）前山城の落城の際に伴野氏の家臣、桜井郷の桜井其の子、諏訪十という九才ばかりの童児が遊びから帰って、家の門戸が閉ざされているのをみて、父の教えに従って鞋道づたいに前山城にいき、途中敵兵に追われながらも危うく伯父に助けられて城中に入り、激しい合戦の模様を目撃したことが四時譜叢に書かれているが、当時の地方武士＝農民の姿をありありととらえることができる。ふだんは土地を耕作し、いざといえれば城にかけつける兵農未分化の時代であったのである。

以上が中世に至るまでの桜井村の概略であるが、さいごに桜井村の寺院関係についてみると次のようである。

平馬山延命寺は、寺伝によれば平安時代に創建され、當時堂宇すこぶる広大であったが、天正年間に焼失した。これを天正十一年（一五八三）に平馬城主源実相が、じぶんの居城の丘の一部に中興開基したものであるという。

桜井神社諏訪神社の西に神宮寺がある。寛永六年（一六二九）検地のときは神久寺といつて諏訪神社の別当寺であった。その他下桜井に金剛寺、桜井新田に極楽寺があったが、この二つはいずれも江戸時代になっての開基で、いまは廃寺となっている。

伴野庄桜井郷が上桜井・中桜井・下桜井の三ヶ村に分かれたのは江戸時代の寛永六年になってで、明暦三年（一六五七）には桜井新田も一村をなし四ヶ村となつた。明治八年三月これらが合併して一村となり桜井村と称した。

（井出正義）

## II 調査の経緯

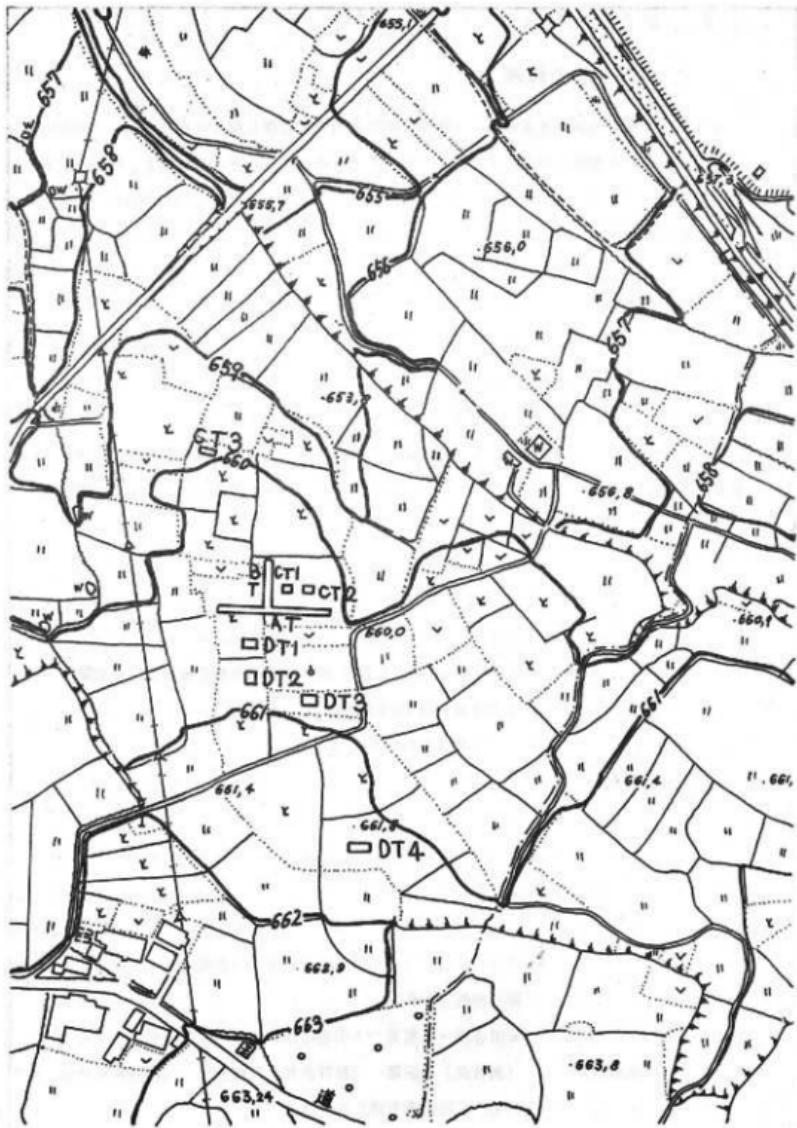
### 1 調査に至る経過

佐久市大字桜井上桜井北遺跡は、千曲川及び片貝川の氾濫源に無数に存在する、自然堤防上に立地している。本遺跡は昭和3年発行の八幡一郎著「南佐久郡の考古学的調査」内の先史時代遺物発見地名表に、桜井村・上桜井に弥生式土器の出土が記されているのを初めに、昭和31年発行「信濃史料」第1巻上では、桜井地区 1775、上桜井、上桜井北(和泉屋敷、四十九塚の取、平馬塚)台地に(鐵)石鎚、磨石斧、(赤)葦清水式、(土)前期一鋸、その他破片、後期(須)後期とけいさいされているのが見える。

さて今回、本遺跡が緊急発掘調査を行なう契機は、本年度以前調査した中道・三塚・市道遺跡等と同様、昭和52年度佐久平野場整備地域にはいるため破壊されることがやむなきに至ったからである。そこで昭和52年12月23日、県文化課指導主事丸山敏一郎氏、地元研究者藤沢平治氏、東信土地改良事務所、佐久市教委の4者が現場において協議をした結果、遺跡の範囲確認と地層状況把握の為試掘調査を行なうことが決まった。以上の経過から発掘担当者に藤沢平治氏を依頼し8月2日より実施する運びとなった。

### 2 調査概要

- (1) 調査委託者 長野県東信土地改良事務所 所長 五十嵐以正
- (2) 調査受託者 佐久市大字中込 3056番地 佐久市教育委員会教育長 浅沼繁
- (3) 調査場所 佐久市大字桜井 1100番地他
- (4) 調査期間 昭和52年8月2日～8月30日
- (5) 調査参加者
  - 〔調査担当者〕 藤沢平治
  - 〔調査員〕 武藤金・森泉定勝・三石延雄・井上行雄・臼田武正・林幸彦
  - 〔協力者〕 白田てい・柳沢けい子・木次まち子・金森春代・臼田靖子<以上桜井地区地元協力者> 萩原厚一・林文典<大学生> 安田一子・前島和子・市川浩子・堤 隆・渋川宗生・田崎潤一・小平敬一<以上野沢南高校郷土史班>
  - 安田春美・花里英一・羽田野卓也<その他高校生>
- (6) 調査方法



第2図 遺跡の地形及びトレンチ設定図 (1 : 2500)

本試掘調査の目的は、遺跡の存在範囲及び地層状況を適格に把握することである。この目的に沿って下記の方法で試掘調査を行なう。

＜トレンチ方法＞

対象地区 15000 m<sup>2</sup> 内のうち遺物の分布が最も濃密に散布していた地区を最重点地域とし重点的にトレンチを設定し（AT・BT・CT1・CT2）、さらにその北方にCT3、南方にDT1～DT4をバランスよく配置して、遺構の範囲及び地層状況を追求する。特に重点地域のトレンチ設定の方法は、本遺跡が立地している微高地の形成状況を把握するため横断する形のトレンチ（AT）と従断する形のトレンチ（BT）をT字形になして設定した。

### 3 調査日誌

○8月2日 (火) <はれ>

遺跡対象地区内で最も遺物の散布が濃密な地域（最重点地域）である桑畠の桑を、重機により抜根する。

○8月3日 (水) <はれ>

昨日、重機により抜根された畠の最東端にテントを設定し、機材の搬入を行う。そして最重点地域の遺構分布状況及び地層状況を把握するため、微高地をほぼ縦横するよう東西に幅2m、長さ56mのAトレンチ（AT）を、南北に幅2m、長さ24mのBトレンチ（BT）を設定し、午後よりAT 4・6・9と4m区割の1つ置きに掘り下げを開始する。今日の暑さはすごく、汗が滴のように吹き出し体はなえてぐったりしてしまう。

○8月4日 (木) <はれ>

AT内の掘り下げ作業を続行し、AT 1・2・8・9・11にはいる。又BTも2・4・6の掘り下げ作業を開始し、本日は地層状況のおおまかな状況がわかりはじめる。

○8月5日 (金) <はれ>

AT 1・2・6・7・8・9とBT 2・3の掘り下げ作業を行なう。

○8月6日 (土) <はれ>

AT 6・7・8とBT 2・3・4・6の掘り下げを行ない最重点地域内の東側に新たにCT1・2トレンチを設定する。

○8月7日 (日)

休み

○8月8日 (月) <雨>

雨のため中止

第2表 試掘調査日誌表

日付	8 2	8 3	8 4	8 5	8 6	8 7	8 8	8 9	8 10	8 11	8 12	8 13	8 14	8 15	~ .	8 30	
天気	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—		
全 体	[森の抜根]	[機材運搬、テント設営]		[報告書作製]	[トレンチ設定]	[掘り下げ作業]	[実測作業]										
	1																
-	2																
A	3																
ト	4																
レ	5																
ン	6																
チ	7																
	8																
-	9																
-	10																
-	11																
-	12																
-	13																
-	14																
B	1																
ト	2																
レ	3																
ン	4																
チ	5																
	6																
C	1																
ト	2																
レ	3																
ン	4																
チ	5																
D	1																
ト	2																
レ	3																
ン	4																

[森の抜根] 機材運搬、テント設営 [報告書作製] [トレンチ設定] [掘り下げ作業] [実測作業]

○8月9日(火)くはれ>

AT 4・5・6・7・8・9とBT 2・3・4とCT 1・2の掘り下げ作業を行ないほぼ最重点地域の地層状況がわかる。現在の微高地は、北方にせりだし、東西両端が低地になっているが、ATの土層断面より遺物が出土しなくなる土層であるⅣ層のありかたが、東西両端ではかなり高い部分で確認されるが、中央部では黒色を呈した土層がかなり深くまで存在し、人間がまだこの沖積地に降りて生活をする以前は谷地であったのではないかと推測される。又DT 1・2を最重点地域の南方に設定し掘り下げを開始する。

○8月10日(水)くはれ>

AT 14・CT 1・DT 1・2の掘り下げ作業及びCT 3・DT 3・4のトレンチを新たに設定し、対象地内すべてにトレンチをバランスよく配置した。本日よりATの北面、BTの西面の土層断面の実測作業開始。

○8月11日(木)くはれ>

DT 2・3掘り下げ作業を行ない、AT・BTの土層断面実測作業続行又併行してトレンチ設定平面実測も開始する。DT 2より完形の杯形土器の3個体出土。

○8月12日(金)くはれ>

CT 3・DT 2・3・4の掘り下げ作業を行ない、本日で全トレンチ内の掘り下げ作業はすべて完了し、若干の実測作業を残して本試掘調査の大部分は終了した。

○8月13日(土)

休日

○8月14日(日)くはれ>

残りの実測作業を行ない、本日をもって現場での作業は一切終了した。

○8月15日(月)～8月30日(火)

試掘調査報告書の作製を行なう。

(事務局)

### III 調査結果

#### 1 層序

I層	褐色	砂層	小礫少量
II層	茶褐色	粘質 hard	小礫多量
III層	黒褐色	粘質 hard	小礫多量 遺物多量
IV層	漆黒色	粘質	疊合ます
V層	黒褐色	粘質	疊合ます
VI層	黒色	粘質	疊合ます
VII層	黑色	粘質 soft	疊少量
VIII層	シラ黒色	粘質	疊少量 (炭化物多い) 住居址床直上層?
IX層	黄色	砂疊 (砂粒粗い)	疊多量遺物を含まなくなる層
X層	黄褐色	粘質	疊合ます CT 3のみ

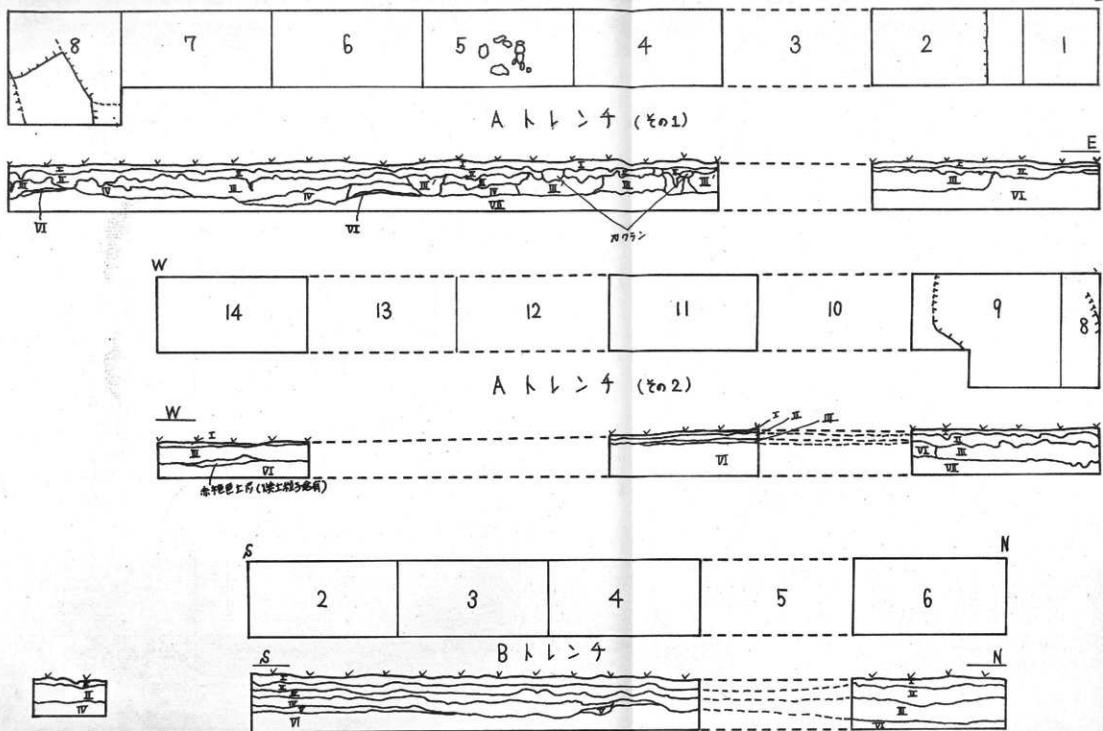
I・II層は耕作土によるカクラン層で、III層は、ほぼ全地域に存在する遺物を包含する層と思われる。VI層は千曲川の河床疊層で遺物の存在はこの層よりなくなる。AT及びBTの内においてであるが、生活面はIII層内に一面存在しているようであるが、微高地、中央部においては黒色土層中の黒色土層の落ち込みとなる可能性が十分考えられこの部分での遺構プラン確認作業は、相当困難が予想される。しかし微高地両端には黄色を基調とした砂疊層（IX層）が、耕作土層を取り除くと現われることで落ち込みはある程度検出しやすいのではないかと推測される。

#### 2 トレンチ別概要

##### (1) Aトレンチ

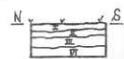
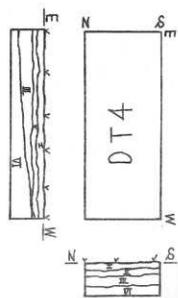
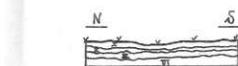
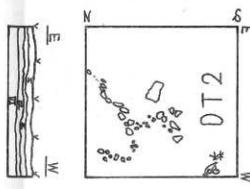
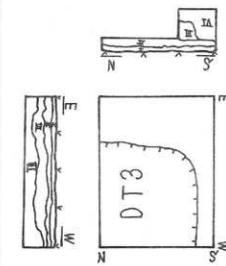
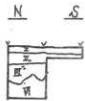
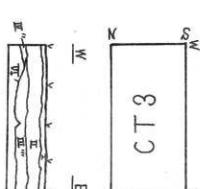
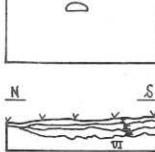
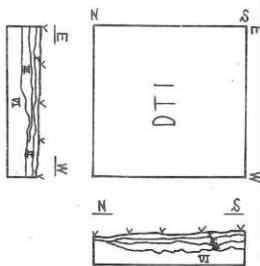
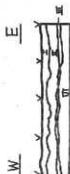
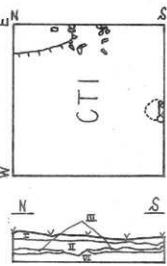
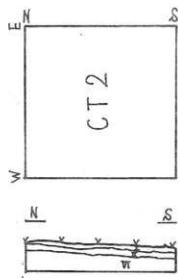
AトレンチはBTと共に微高地形成過程把握をかねて重点地域に設定したトレンチで幅2m、長さ56mの微高地を横断する形をとり、東方より4mおきの区割を14区割つくる。このうち調査しなかった区割は10・12・13の3区割だけで、ほぼ全面的に掘り下げを行なう。その結果層位は、I・II・III・IV・V・VI・VII層に分かれ、微高地両端はVII層が高い位置から見られ、中央部は凹部を見せるという当初予層していた層序とはたいへん異なる見解が得られた。遺物はIII層内より多量に出土し、時期的には鬼高窓～国分期に属するものと思われる。又AT5内には石組のカマドと思われる遺構が存在し、AT8・9・14内にも住居址と思われる落ち込みが確認でき、分布調査のおり濃密に散布していた遺物のとおり、かなり重複して遺構が存在するものと推測できる。

##### (2) Bトレンチ



第3図 A, Bトレンチ平面図及び断面図 (1 : 100)

第4図 C.口トレンチ平面図及び断面図  
(1:100)



BトレントはAT9とT字形に交じわり微高地を北方に向って陡断する形をなして幅2m、長さ24mのトレントで南方より4mおきの区割を6区割つくる。このうち調査しなかった区割は、1・5の2区割ではほぼ全面的に掘り下げを行なう。層位はI・II・III・IV・V・VI・VII層に分かれ、かなり黒色を呈した土層が深い。

#### (3) Cトレント

Cトレントは、CT1・CT2・CT3の3つ設定しCT1・CT2は重点的地域内のATとBTの東側に、4m×4mの区割で設定しCT3は対象地最北部（微高地先端部）に2m×4mの区割を設定し、地層状況、遺構分布状況を確認する。層位はCT1が、I・II・IV・VI層で、CT2が、I・II・VI層でCT3のみまったく違った層位が存在してI・II・III'・III''・VIとなっている。又CT1からは骨片及び炭化物が出土している。

#### (4) Dトレント

Dトレントは、DT1・DT2・DT3・DT4の4ヶ所設定し重点地域より南方に4m×4mの区割をバランスよく配置した。層位はすべてのトレントともI・II・III・VI層に分かれ本微高地の一般的層位が確認できた。DT2のIII層内より完形の土師器、杯形土器2個体と灰釉、陶器の杯、1個体が出土している。又DT3には確実に住居址と思われる落ち込みが検出された。

（高村博文）

### 3まとめ

白田町から野沢、岸野に至る沖積地は、この地域の歴史が究明されることによって、単に佐久のみならず、全国的にも、古代の農村の情態を明らかにすることもできるうる地点であり、この点については「1の2桜井の歴史」において述べたところである。先年からの圃場整備にともなって行なってきた遺跡発掘調査によって住居址が確認され集落等の存在が明らかになりつつある。さてこの上桜井北遺跡は、昭和3年頃より文献にも記載されている遺跡地であり、昭和52年2月23日現地での協議の折にも、耕作土表面に土師器の散布していることを確認したのである。本遺跡が千曲川の西岸における河岸段丘先端部に位置するものであり、沖積地上に広がる遺跡群の東北の一地点を占めると考え調査に入った。今回の調査において千曲川の堆積による疊層（VI層）の上に遺物包含層（第III層）が確認された。III層は土師器を使用した時代の生活面であり、後世において大きなカク乱を受けずに残っていると考えられる。更に「III、調査結果2トレント別概要」において記述したように、ATの石組のカマド、住居址と推定される黒色土の落ち込み、DTの住居址と推定される落ち込み等が確認され、又特殊遺構をともなう骨片等の出土を見、第III層における多量の土器出土と考え合わせて、この調査が正式調査でないため落ち込みの性格を正確に調査していないが、古代人の居住地域（集落）性格をもった遺跡であることが推察される。

（藤沢平治）

